現代中央アジアにおける民族と公民の形成についての研究
－戦前スターリン期ウズベキスタン・ソヴィエト作家同盟の事例から－

須　田　　将
北海道大学大学院文学研究科　博士課程
（現　日本学術振興会　特別研究員 DC）

本研究の背景・目的

「民族」は固定的・絶対的なものではなく、様々な社会関係のもとで生成・変容し、構築・再構築されるものである。つまり、民族がいかにしてつくられるかは、歴史的検証を必要とする問題なのである。現代中央アジアに関しても、民族の形成を考察するうえでは、ソ連時代とくに連邦と民族共和国の枠組みが確立したスターリン期（1920 年代末～ 1953）に実施された文化・社会政策と、その担い手であり対象でもあった人々の実践が歴史的に問われなければならないだろう。革命後のソヴィエト政権は、現地住民の参加を促し社会主義社会の建設に動員するため、エスニック集団への帰属意識やムスリムとしてのアイデンティティなどを複合的にもち、明確な民族意識は確立していないこの地域の住民を、民族を区分単位とする共和国に分けた（民族共和国境界画定、1924 年）。そして、共和国ごとに連邦の統合に資する範囲でフォーマット化された公定のソヴィエト民族文化を奨励し、核となる民族（共和国の名を冠した「名称民族」）を形成した。

また、従来あまり顧みられなかった点だが、ソ連では、こうした民族の上位に、基本的には法的な観点からの同権性によって特徴づけられる「公民」が位置づけられた（「公民」とは、市民と同義だが、都市住民以外の諸階層を含んだ、国家によって保障された国民としての地位や資格の意味を強調した日本の憲法学の概念であり、ソ連の「市民［гражданин］」概念に概ね対応するものとしてここでは用いる）。民族的な要素は、スターリンの「内容において社会主義的、形式において民族的」というテーゼに則り、社会主義的な価値観を普及するうえでの「形式」的な手段とされた。こうしたことから、ソ連邦の「公民」は単に同権性によって特徴づけられるだけではなく、社会主義的な文化を共有することが想定されていたといえよう。とくに、1937 年制定のソ連憲法（スターリン憲法）では、階級対立が基本的に解消されたという理解により、従来の「勤労者」から、「公民」の基本的権利と義務を表したものに規定が変わった。公定の民族範疇とともに、階級を解消し多種多様な民族を含む連邦国家の統合を進めるうえで「公民」としての地位、権利と義務が重要となったのである。

以上のことから、中央アジアにおける「民族」と「公民」の形成は、とくにスターリン期の現代史の検討を要するが、日本では東洋史や革命期の研究が先行していることもあり、考察が不可欠なスターリン期について、制度・政策の実践レベルまで詳しく検討されているわけではない。

報告者は、過去 2 年半にわたり、中央アジアのウズベキスタンを主な調査地として、第二次世界大戦前の文書館史料（共産党･国家行政文書、民警･検察の調書、「マハッラ（街区）委員会」やソヴィエト作家同盟といった社会団体のフォンド等）や地方出版物を収集し、こうした一次史料をもとに、ソ連時代の中央アジアの民族と公民について、ナショナリズム論と公共性論の成果等も参照しながら研究を進めてきた。本学術奨励金の交付年度内における研究成果の一部を具体的に示すうえで、本報告では、戦前スターリン期におけるウズベキスタン・ソヴィエト作家同盟の文書（ウズベキスタン中央国家文書館所蔵 [ЦГА РУз ф.2356]、会議・大会の速記録や組織委員会議事録などを含むファイル約 80 冊）を主な史料として、「民族（文化）」の形成を扱う。ソヴィエト作家同盟は、社会主義的な規範を体現する文化エリートの作家を公認し、彼らの正統的なテキストの創作を通じて、ソヴィエト「民族」と、社会主義的価値を共有する「公民」を形成する役割を担ったことから、検討が必要である。

考察・成果

文書館史料の検討から得られた論点としては、以下を主張することができる。

第一に、ソヴィエト作家同盟の設立は、新たな全国組織による管理を通じて従来のプロレタリアート作家協会の急進性を抑制するという「モスクワの論理」によるものだったが、ウズベキスタンでの共和国組織設立からは、民族政策上の配慮も伺える。1932～33年にかけて、元ウズベク・プロレタリアート作家協会のロシア人幹部が「トロツキスト」として批判され、その「反党的言動」を理由に排除された。これには、ロシア人主体のプロレタリアート作家に替えて、ウズベク人作家組織「赤鉛筆(Qizil qalam)」出身の新進作家を同盟活動の中心に据える狙いもあった。1934年のソヴィエト作家同盟第一回共和国大会では、ロシア人作家に対して「大国ショーヴィニズム」批判が展開された。他方、ウズベク人作家に対しては共和国共産党第一書記の演説で、先進ロシア文学の学習と、伝統的な「万歳主義」にかわるボリシェヴィズムに則った「批判と自己批判」が奨励された。

もっとも、こうした民族政策上の配慮がなされる一方で、1930年代半ばにかけてウズベク語による文学作品の出版状況は悪化し、書籍の出版数は年間150点（32年）から49点（35年）へと減少した。このことは、出版に用いられる国費「文学基金」の配分や作品収入をめぐる作家同士の妬みあいの誘因となったとみられる。ソヴィエト作家同盟第二回共和国大会（1937年）では、座談会での作品収入を巡る個人的な諍いが新進作家ガフール・グロムによるアブドゥッラ・カーディリー（ウズベク語歴史小説の始祖）告発の発端になったことが冒頭で言及された。

史料からは、当時の少数のウズベク人作家たちの、緊張を孕んだ人間関係が伺える（作家同盟の会員数は正確には分からないが、39年のリストによれば共和国中央組織で正規会員・候補ともに30名程度であった）。30年代のウズベク共和国の検閲総局は、軍事機密の漏洩に対処するため新聞検閲を重視していた。幹部の頻繁な異動、検閲官の能力不足も手伝って、普段から作品批判を行い、社会主義社会の担い手である「新しい人間」を描くよう創作圧力を加えることは、基本的に作家たち自身に課された役割だった。対立はウズベク人の民族作家・批評家同士の間で、革命以前にマドラサ（イスラーム高等教育機関）で学びジャディード知識人の流れを汲んだ「旧世代」の作家と、革命後のソヴィエト政権の恩恵に与りモスクワやレニングラードに留学するなど、社会的に上昇する機会を得た新進作家たちの間で生じていた。もっとも、35年まで同盟議長を務めたマジディー（ヒヴァ出身のウズベク人で20年代にモスクワ留学経験があった）は、実は革命前にはオレンブルグのマドラサ（イスラーム高等教育機関）で学んだ人物であり、そうした過去をもつ批評家がボリシェヴィズムに則ってジャディード作家批判を先導したことからも分かるように、実際には必ずしも明確な構図に収まらない、複雑な状況が存在した。

第二に、ソヴィエト民族文化へ大テロル期の政治思想が作用したことである。1937年はテロルが本格化した年として知られるが、モスクワで「ウズベク文化のデカーダ（十日間）」が催され、ウズベク・ソヴィエト民族文化の「開花」が宣伝された年でもあった。1930年代を通じて小説の創作は振るわず、詩作や表象性に富んだ舞台芸術が盛んになった。ウズベク共和国では30年代末に、15世紀のヘラート（現アフガニスタン）で活躍したナヴァーイーが、「民族」を民族共和国の成立以前に辿り代表的な人物をとりあげるソ連の原初的な史観により「ウズベク民族詩人」として称揚された。そのナヴァーイーの詩作『ファルハドとシリン』のように、現地の「民族的」な題材に、社会主義リアリズムによる解釈を加え、ロシア人芸術家の「友好的な支援」を得てモスクワで演じられるものが、ソヴィエト民族文化の「開花」の象徴として評価されたのである。

ところで、そうしたソ連的に「フォーマット化」された当時の作品には、国内外の「敵」との闘争が明確に表象されていた。『ファルハドとシリン』に関しては、ササン朝君主ホスロー2世の外敵・階級敵としての演出がなされ、王にシリンが魅かれていく12世紀のニザーミー作『ホスローとシリン』とはナヴァーイー作が異なることが強調された。この他、（後に異例の長期間、作家同盟議長となった）新進作家ヤシンの脚本による最初のウズベク・オペラ作『ブラン（嵐）』（1939年初演）では、中央アジアの1916年反乱が題材となった。もっとも、この作品は初演から不評であり、まもなく上演されなくなった。表向きの批判理由は、民族音楽の編曲が洗練されていないというものであったが、このオペラでは第一次世界大戦での後方動員令に対する中央アジア諸民族の蜂起が扱われ、「敵」に設定されたのがロシア人の懲罰隊であったことが影響したことは想像に難くない。本研究の目的に照らし合わせて重要な点は、ソ連の「諸民族の友好」と、連邦国家の統合に資することを前提として「民族」を原初的に捉えて民族共和国の成立より以前に遡り、外敵に抵抗した英雄を見出していくとい

う、戦前ソ連の民族（文化）形成の特徴が、共和国の作品に顕著だったことである。

「敵」のイメージは、国外だけでなく国内にも求められた。例えば、1937 年のウズベキスタンの劇作品コンクールでも、タタール人女性作家アッパコヴァのウズベク語による少年向け作品『敵』が最優秀賞を受賞したが、その筋書きとは、ドイツ語授業を妨害するなどといった小学生の主人公の不良化が、実は文学教師サドリッディン・ドムラザーデ（代表的なジャディード知識人であった作家アイニーが明らかなモデル）に唆されたものであり、学校集会において老獪な民族主義者としてのドムラザーデの顔が暴露されるというもので、「我々の間に潜む敵」に対する警戒という主題が時宜に適うとして評価されたのである。

この他、民族文化の「開花」を示すうえで、ウズベク人作家の作品が機関誌などでロシア語に翻訳紹介されることでその「民族主義」への批判がかえって強まったり、新進作家たちが創作や批評において「排除」の要請に応えることで活躍の機会を獲得していったりした。こうしたことから、ソヴィエト民族文化の奨励とテロルは、単に同時代の独立したパラレルな現象ではなく、関連性をもつものであったといえる。

第三に、「旧世代」のジャディード主義の影響をうけた作家たちは、先行研究では抑圧の犠牲者として一括され語られがちであったが、新進ウズベク人作家・批評家の間でも大テロルに至るまでの時期の彼らに対する評価は一様でなく、温度差がみられた点である。かつて同じ「チャガタイ談話会」（アラビア語・ペルシャ語の影響を排しテュルク語古語 [チャガタイ語] を源泉とする文語体の確立を目指した文学結社）に属した代表的な作家であっても、詩人・劇作家チョルパンは同盟加入さえ認められず、若手作家アイベクによる芸術的観点からの擁護の試みも功を奏しなかったのとは対照的に、カーディリーは（集団化を扱った作品『アビド・ケトモン』が褒貶相半ばしたが）1937 年に同盟から除名されるまで幹部会員という地位を得て活動した。ウズベク共産党宣伝文化部長で同盟幹部会員のベレギンは、同盟内の委員会でアイベクらの追及役であったが、その彼も「チョルパンとカーディリーの間には天と地の差がある」としてカーディリーには同情的だったことを同盟大会で批判され、前述のヤシンらによって除名された後、逮捕・処刑された。

もっとも、チョルパンにせよカーディリーにせよ、作家のソヴィエト政権への抵抗を 1930 年代の作品内容から見出すことは、（文学研究の従来の主張に反して）困難に思われる。実際に作家追及の決め手となったのは、当時の作品内容よりもむしろ、フィトラトら「反革命民族主義者」との過去の個人的なつきあいの濃淡であり、とくに作家のネットワークを育んできた作品朗読を伴う中央アジアの「伝統的」な饗宴（ギャプ）等での私的な発言であった。（ロシア文化を受容した）タタール人を非難する発言により告発されたエルベクは、「旧世代」の作家はみな過去に民族主義的な教育を受けたものだが、その後ソヴィエト政権下で思想を修正してきたのだと抗弁した。他方、「旧世代」との接触が多かった「新世代」の作家たちは、例えばガフール・グロムが自身の飲酒癖に付け込まれたことを主張し、親族女性の公共活動参加をアピールしたほか（ムスリム女性の「解放」は依然、重要課題であり続けた）、アリムジョンは『プラウダ』論説の尻馬に乗りカーディリーらを日本の手先と非難したりして追及を逃れようとした。ちなみに、このアリムジョンは、1937 年に一旦除名されながらも、コムソモール（共産主義青年同盟）集会で支持をとりつけた後、自身の排除は「人民の敵」の隠蔽工作によるものであったと主張し、形勢を逆転させて旧執行部の追及にまわり、39 年には同盟議長に選出された人物である。ソヴィエト作家同盟は、戦前スターリン期に特徴的な不安定で流動的な「流砂社会」の縮図であったといえる。

第四に、「公民」形成との関係についてである。近年、ロシア史研究では、1920 年代を中心としたロシア共和国の「公民的ネイション・ビルディング」や、30 年代前半のモスクワでの女性の活動を通じた「スターリニスト的公共性」を論じた意欲的な研究が登場した。人々によるソヴィエト権力の受容を扱ったこうした問題は、核心となる「オプシチェーストヴェンノスチ」（общественность 世論、公衆、公共活動、公共性などの意味）の概念や、その具体的な担い手について、定式化がなされずに用いられていたこともあり、正面から取り上げることには多くの困難がつきまとう。また、自由民主主義を前提とする市民社会論を適用してソ連邦の「公民」を検討することはできないことは論を俟たない。

だが、ソ連的な「公共社会」の一員としてふさわしい義務を担うべき者として、作家たちがソヴィエト作家同盟という公認の「社会団体」を与えられ、公の場において、社会主義の達成を描いた作品を生み出す要請に従

い、プーシキンやゴーリキーの工場労働者を対象とした朗読会等の活動に参加したことは注目に値する。彼らはモスクワでの全連邦農業博覧会や、フェルガナ運河建設といった大事業にも作家として動員された。ソ連最高会議選挙に際しても、タシュケントの作家集会では「我々の国家の最良の人物の評伝の創作は、作家に最大限の用心深さ、技量、公民的鋭敏さを要求する、困難で責任ある仕事である」として、ソ連国家の「公民」としての義務が喚起されたのである。むろん、それは、大テロルにおいては、社会に潜む「人民の敵」を識別する鋭敏さの要求と容易に結びつくものであった。

結論と今後の展望

本研究では、「民族」と「公民」の形成という抽象的な主題を扱ううえで、中央アジア現地の文化エリートでありソ連的な「公共社会」の一員であったソヴィエト作家同盟所属の作家について、具体的な検討を行った。得られた結論は暫定的であるが、①「内容において社会主義的、形式において民族的」（スターリン）な文化の推奨がなされながらも、ロシア語やロシア文化の先進性が強調されていった。②新しいソヴィエト民族文化の創造とテロルは共和国の創作現場で相互に関連し合っていた。③戦争の脅威をうけて、国外の敵と、国内の潜在的な「第五列」が意識されるなかで、連邦内の統合に向けて社会をいわば「フォーマット化」する政策がとられたが、ソヴィエト作家同盟組織も、その受け手であるとともに担い手であったと位置づけられること、が主張できる。これまで報告者は、主にウズベキスタンの街区社会における住民と彼らに対する政策を歴史的に検討してきたが、「民族」と「公民」の形成については、大衆とエリートの問題とつきあわせるとともに、時系列的にも、戦争を経た戦後からソ連解体・共和国の独立以降も含めたより広いスパンを対象に、個別研究を積み重ねていく必要があろう。

謝　辞

本研究を遂行するにあたり、V.A. ゲルマノフ研究員（ウズベキスタン科学アカデミー歴史研究所）から調査上のご助力をいただいた。さらには、大学院博士課程学生の萌芽的研究であるにもかかわらず、財団法人三島海雲記念財団にご評価いただくことにより、研究を続けることができた。なお、本研究の付随的成果に基づき、2009 年度米国スラブ学会や 2010 年度東アジア・スラブ学会でも報告を行い、有益なコメントを得ることができた。この報告をもって、交付に対する謝辞にかえる次第である。

参考文献

文書館史料

1）ЦГА РУз ф. Р-2356［ウズベキスタン共和国国家中央文書館ウズベキスタン・ソヴィエト作家同盟フォンド］

2）ЦГА РУз ф. Р-1722［同ウズベク共和国教育人民委員部付属検閲総局フォンド］

二次史料（作家の作品は省く）

1）小松久男 . 1996.『革命の中央アジア―あるジャディードの肖像』東京大学出版会 .

2）Agir, Ahmet. 2003. *From Colonial Past to Post-Colonial Future: Three Uzbek Novels* (PhD dissertation, University of Wisconsin-Madison, 2003).

3）Allworth, Edward. 1964. *Uzbek Literary Politics* (The Hague: Mouton and Co.).

4）История узбекской советской музыки. Т.1. Ташкент. 1972.

5）Kara, Halim. 2000. “Resisting Narratives: Reading Abdulhamid Suleymon Cholpan from a Postcolonial Perspective,” (PhD dissertation, Indiana University).

6）Lyons, Shawn T. 1999. “Uzbek Historical Fiction and Russian Colinialism, 1918-1936” (PhD dissertation, University of Wisconsin-Madison).

7）Mirvaliev, Sobir. Rixsiya Shokirova (taxrir). *O`zbek adiblari: XX asr o`zbek adabiyoti. O`quv qo`llama* (Toshkent: Fan, 2007).

8）Mirzaev, Saydulla. *XX Asr o`zbek adabiyoti* (Toshkent: Yangi asr avlodi, 2005).

9）Qodiriy, Habibulla. *Otamdan Xotira* (Toshkent : Yangi asr avlodi, 2005).